

機 関 名	東京外国語大学	機関番号	12603	拠点番号	D04
1. 機関の代表者 (学 長)	(ふりがなくローマ字) Kameyama Ikuo (氏 名) 亀山 郁夫				
2. 申請分野 (該当するものに0印)	A<生命科学> B<化学, 材料科学> C<情報, 電気, 電子> D<人文科学> E<学際, 複合, 新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	コーパスに基づく言語学教育研究拠点 Center for Corpus-based Linguistics and Language Education				
研究分野及びキーワード	<研究分野 言語学>(語用論)(第二言語教育)(教授法・学習理論)(統語論)(形態論)				
4. 専攻等名	大学院総合国際学研究科言語文化専攻(地域文化研究科地域文化専攻 平成21年4月1日改組) / アジア・アフリカ言語文化研究所				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)					
6. 事業推進担当者	計 15 名 ※他の大学等と連携した取組の場合: 拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [%]				
ふりがなくローマ字 氏 名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役 割 分 担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー) Minegishi Makoto 峰岸 真琴(55)	アジア・アフリカ言語文化 研究所・教授	言語類型論, 東 南アジア言語学・ 文学修士	研究の統括		
Bhaskararao Peri バースカララオ・ペー リ(64)	アジア・アフリカ言語文化 研究所・教授	南アジア諸言語 学, 音声学, 文 学 情 報 学 ・ Ph. D.	国際研究ネットワーク構築(国際連携)		
Nakayama Toshihide 中山 俊秀(48)	アジア・アフリカ言語文化 研究所・教授	北米言語学・ Ph. D.	PD育成事業推進		
Hieda Osamu 稗田 乃(60)	アジア・アフリカ言語文化 研究所・教授	アフリカ言語学・文 学博士	フィールド言語学教育プログラム推進		
Nakagawa Hiroshi 中川 裕(51)	総合国際学研究院・教授	音声学, コサン言 語学・Ph. D.	フィールド言語学教育プログラム推進		
Nakazawa Hidehiko 中澤 英彦(64)	総合国際学研究院・教授	スラブ語学, ロシア 語学・文学修士	コーパス言語学研究プログラム推進		
Hayatsu Emiko 早津 恵美子(57)	総合国際学研究院・教授	日本語学・文学 博士	コーパス言語学教育プログラム推進		
Kawaguchi Yuji 川口 裕司(54)	総合国際学研究院・教授	フランス語学, トルコ 語学, 言語学・ 文学博士	国際研究ネットワーク構築(成果発信)		
Negishi Masashi 根岸 雅史(53)	総合国際学研究院・教授	英語教育学・ Ph. D.	言語情報学研究プログラム推進		
Umino Tae 海野 多枝(45)	総合国際学研究院・准教授	言語教育学, 第 二言語習得論・ Ph. D.	言語情報学教育プログラム推進		
Tomimori Nobuo 富盛 伸夫(64)	総合国際学研究院・教授	言語学, ロマンズ言 語学・文学修士	国際教育ネットワーク構築		
Narita Takashi 成田 節(54)	総合国際学研究院・教授	ドイツ語学・文学 修士	大学院教育プログラム推進		
Sano Hiroshi 佐野 洋(51)	総合国際学研究院・教授	言語情報工学・ 工学修士	コーパス構築・ツール開発		
Tono Yukio 投野 由紀夫(50)	総合国際学研究院・教授	コーパス言語学・ Ph. D.	言語情報学研究プログラム推進		
Sawada Hideo 澤田 英夫(48)	アジア・アフリカ言語文化 研究所・准教授	言語学・文学修 士	コーパス言語学研究プログラム推進		

機関（連携先機関）名	東京外国語大学
拠点のプログラム名称	コーパスに基づく言語学教育研究拠点
中核となる専攻等名	大学院総合国際学研究所言語文化専攻（地域文化研究科地域文化専攻 平成21年4月1日改組）
事業推進担当者	（拠点リーダー）峰岸 真琴 外14名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本拠点形成計画の目的は、言語学・言語情報学の若手研究者に、フィールド言語学とコーパス言語学、ならびに言語教育学の実習という三つの実践トレーニングの機会を提供することで、言語文化の多様性に通じた、複眼的視野を持つ言語研究者・言語教育者を育成することである。</p> <p>上記の目的を実現するために、本プログラムでは以下の三つの教育研究プログラムを提供する。</p> <p>(1) フィールド言語学：世界の主要言語だけでなく、少数民族の言語および文化を臨地研究するための方法論（調音音声学、記述言語学、フィールド調査法など）を習得させる。</p> <p>(2) コーパス言語学：様々な言語情報（現地の録音資料や文献、テキスト）を収集するための方法を学び、研究目的に応じてコーパス化し、それを言語分析する手法を習得させる。</p> <p>(3) 言語情報学：自然会話や第二言語教育の教育実践の場から得られる言語運用データのコーパス分析の成果を言語教育に応用し、言語運用に基づく言語教育学の方法と実践を習得させる。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>本拠点の教育研究プログラムは、以下の教育・人材育成事業および研究プログラムを計画・実施することにより、国際的な拠点形成を推進することができた。</p> <p>教育・人材育成面</p> <ul style="list-style-type: none"> 三分野の教育プログラムを充実させ、複数分野の専門家の指導による「合同ゼミナール」（計55回）、「コーパス言語学リレー講義」のほか、後期課程共通科目として「多分野交流研究」を開設することで、言語文化の多様性を学び、複眼的視野を体得するための合同指導体制を確立した。 三分野を専門とする第一線の研究者をイギリス、フランス、カナダ、ドイツ、トルコ、シンガポール、台湾等から招へいして国際シンポジウム（計7回）および国際ワークショップ（計5回）、講演会（計30回）を開催した。国際シンポジウムでは本事業推進担当者および若手研究者が研究発表を行った。ワークショップには本学の博士後期課程の学生だけでなく、他大学からも多数の若手研究者が参加した。 主要な国際会議の報告集はオランダの言語学専門書店である John Benjamins 社から本学の名を冠した TUFs Studies in Linguistics Series としてシリーズ化され、4巻が出版された。 次世代研究者育成のために、拠点では国内の若手研究者を公募によりリサーチ・フェローとして、本学博士後期課程学生をジュニア・フェローとして採用した。また教員の指導による自主研究プロジェクトに学生を参加させて、海外に教員とともに学生を派遣し、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、スワヒリ語、トルコ語などの自然会話や、英語、フランス語、日本語などの教育現場での学習者言語データを収集させた。また、若手研究者・学生を国内外での研究発表に派遣することで、国際的な研究実践・発表の機会を提供した。ジュニア・フェローのうち、特に博士論文執筆の最終段階にある者を公募し、経済的な支援も実施した。 国内在住の若手研究者を対象とした公募により、グローバルCOE研究員延べ5名のほか、JSPS特別研究員2名を雇用し、国内外での調査研究に派遣するなどして各自の研究を進めさせたほか、教育研究事業の共同研究に参加させた。 国内外の先端教育研究者をグローバルCOEプログラム特任教授として雇用し、共同研究を実施したほか、雇用した研究員および学生らの論文発表指導、合同ゼミナールの実施および国際的研究教育体制の構築に従事させた。 <p>国際的な研究の展開</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業推進担当教員が指導する研究プロジェクトに若手研究者および学生が参加し、語彙データベースを構築し、これを基に電子辞書（ロシア語、タイ語、スワヒリ語）を作成してweb上で公開した。プロジェクトの研究会は21回を数える。フランス語、スペイン語、ロシア語、トルコ語を始めとするさまざまな言語について現地調査を行なって話し言葉のデータを収集し、品詞検索の可能な話し言葉コーパスを収集してweb上で公開している。 コーパスを用いた言語分析や外国語教育法研究の教育を充実するために、コーパス利用のための教材を編集作成したほか、研究の成果を応用してe-learningシステム(moodle)に移植した。 ロンドン大学、オランダのライデン大学、シンガポール国立大学 (NUS)、フランスの国立東洋言語文化大学 (INALCO) に中間評価を、ライデン大学、NUS、INALCO、ドイツのケルン大学、タイのタマサート大学の研究者に最終評価を依頼した。拠点計画、計画進捗状況の中間評価、最終的な研究成果の評価結果は web 上に公開されている。参考 http://cbllle.tufs.ac.jp/index.php?id=2。 	

6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

・国際的・先端的な教育拠点としての活動

本拠点では、ポスドク、後期課程在籍の学生を先端的研究に参加させることによって、若手研究者に早くから国際的な活動の場を与えることに力を注いできた。

- (1) 国際シンポジウム（計7件、うち1件はタイ国チュラーロンコーン大学との共催でバンコクで開催）、国際ワークショップ（計5件、うち1件は英語コーパス学会と共催）、講演会（計30回、うち海外招へい者によるもの12回）を開催して、世界の第一線の研究者との研究交流の機会を充実し、そこに若手研究者を参加させ、発表の機会を与えた。
- (2) 拠点で開催する研究集会だけでなく、PDや学生を公募により海外に派遣し、海外の協力機関の下で、フィールド言語学、コーパス言語学、言語情報学の三分野に関連する研究を行わせ、学会への参加・発表を支援した。PDは計17名、博士後期課程在籍者は計46名を派遣した。

・国際的プロジェクトを推進する教育研究拠点としての活動

本拠点で推進した研究プロジェクトは、海外の多数の言語研究・言語教育諸機関との国際的な協力によるものであり、データ収集活動の多くを海外で行っている。

- (1) ヨーロッパではモスクワ大学（ロシア）、リーズ大学（イギリス）、ムルシア大学（スペイン）、ワルシャワ大学（ポーランド）、国際プロジェクトPFC（フランス）、アジアでは淡江大学（台湾）、マルマラ大学（トルコ）、さらにタンザニアのスワヒリ語研究所など、海外の多数の言語研究・言語教育諸機関との協力により、自然会話の録音による話し言葉コーパスを構築し、また外国人学習者の英語、日本語データを収集した。これらのデータを基に、国際学習者言語プロジェクトなどの学術交流を行い、国際的な教育研究の基盤を強化した。
- (2) これら先端的な研究プロジェクトの多くは、専門家である事業推進担当者の指導の下、若手研究者・学生が参加することにより、研究の場であると同時に教育、次世代研究者育成の実践の場として機能した。

・国際的な研究成果の発信活動

本拠点の研究プロジェクトの成果は、国際的な出版社から出版されたほか、拠点の web サイトにおいて公開されている。

- (1) 主な国際会議の報告集は、相互査読を経て改稿され、オランダの言語学専門出版社である John Benjamins 社から本学の名を冠した言語学シリーズ (TUFS Linguistics Series) として計4巻出版された。このうちの1巻 Corpus analysis and variation in linguistics, 399 pp, 2009 については、アメリカ言語学会の Language, Vol. 87, 210-212, 2011 に impressive and useful book という好意的な書評が掲載された。海外の一流出版社からの専門シリーズ出版物を持つ大学は、日本国内では希であり、とりわけ言語学の専門シリーズ出版物を持つ日本国内の大学は他にはない。このことは本学の言語研究の国際的競争力を証明するものである。また事業実施期間の推進担当者の国際発表は計39件にのぼっている。
- (2) 本拠点の web サイトでは、拠点の研究活動によって生まれた成果物として、多様な言語の電子化辞書、目的別コーパス、それに基づく分析と研究の報告が挙げられている。中小規模言語データの基礎語彙の電子化公開（ワヒー語、ミャオ語、ロンウオー語）、機械辞書システム（ロシア語、タイ語、スワヒリ語辞書）、品詞検索システム（フランス語、スペイン語）、学習者言語コーパス（日本語、英語、フランス語）など。

これらのオンラインデータは、単に完了した活動に関する「一方的な情報発信」ではなく、新たな国際的な教育研究プロジェクト、教材開発プロジェクトのプロトタイプとしても機能している。英語や日本語だけでなく、多様な言語データを公開していることにより、いわゆる先進国だけでなく、開発途上国、少数言語集団との研究教育上の連携が可能となっている。

・国際的な拠点活動の評価体制

本拠点の活動に関しては、次項に述べるように、海外の言語研究・言語教育機関の専門家による中間評価、最終評価を得ている。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	東京外国語大学	拠点番号	D04
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称	コーパスに基づく言語学教育研究拠点		
中核となる専攻等名	大学院総合国際学研究科言語文化専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)峰岸 真琴		外 14 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援について、本拠点は大学のグランドデザインの中心に位置付けられ、大学院改組と連動して全学的なマネジメント体制の下に取組がなされ、教育研究拠点形成の地歩を固めることができた。

拠点形成全体については、フィールド言語学、コーパス言語学、言語情報学三分野の有機的な連携に基づく言語運用実態を解明するためのカリキュラムの構築や、海外の大学等との共同研究の推進などの拠点形成のための取組が適切になされ、改組して設けられた大学院総合国際学研究科言語文化専攻を基盤とした明確な教育研究体制が構築された。また、国際研究集会や国際共同プロジェクトを通じての若手育成面での努力も十分認められる。

人材育成面については、大学院学生、PDレベルの若手研究者を養成する教育的な枠作り、研究推進と発表のためのインセンティブを与える工夫、派遣プログラム等、様々な形での援助などを通して、国際的に通用する研究者養成はかなりの程度進み、実績があがっていることが確認できる。キャリアパスの形成支援は、キャリアパスデータベースの構築といった有意義な試みが行われたが、実情把握を含めて更に支援が必要である。

研究活動面については、話し言葉コーパス、学習者言語コーパスの構築とこれらのデータを基礎とした共同研究が進められ、多言語にわたるデータ、コーパス等の蓄積が得られたことは大きな成果である。また、国際的な研究連携が進められ、国際会議の成果の刊行により情報発信が積極的に行われた。とりわけ研究成果が定評ある海外の出版社からシリーズで刊行されていることは評価できる。ただし、この事業を統合した結果としての新たな知見という点についてはまだ明確化していないように見受けられる。

今後の展望について、補助期間終了後、大学院の先端的教育研究拠点活動として恒常化されることは高く評価される。ただし、資金的な展望が必ずしも安心できるものとは言えない。

総括評価としては、フィールド、コーパス、言語情報三分野の有機的な連携という方向で、大学院学生・若手研究者がより明確化された履修モデルの下に研究を進めるための体制が、大学院レベルにおける国際的教育拠点として構築されたと言えることができる。